ボリビア・リベラルタとともに生きた日本人－下瀬甚吉－

大島　正裕

（立教大学　ラテンアメリカ研究所研究員）

2024 年は、ボリビアのサンタクルス県にある日系移住地「オキナワ移住地」が創設されて 70 周年にあたる。今では大豆や小麦の生産などでボリビアでは欠かせない地域となったオキナワの苦難の歴史は、よく知られている。1950 年代当時、原生林が茂るサンタクルスで、風土病や過酷な労働で命を落とした移住者の苦難の歴史は、まだまだ風化していない。

他方、ボリビアには既に風化しつつある過去もある。2017 年、筆者は仕事でボリビアの北部にあるパンド県のムクデン(Mukden)という集落を訪問する機会を得たが、不覚にも「ムクデン＝奉天」だったことに後になって気づいた。日露戦争で日本とロシアが最後の決戦を行ったことで知られる「奉天」は中国北東部の地名（現在の中国東北部瀋陽）だが、当時ボリビアにいた日本人たちが戦勝を記念して名付けた地名と考えられる[1]。

実に 100 年前、この当たりにはムクデンのみならず、トキオ（＝東京)、ハポン（＝日本）など多くの日本にちなんだ地名があった。今やその地名の多くは消え去ったが、「ムクデン」のようなほんのわずかな痕跡は残っている。

1910 年代、ボリビアのアマゾンを潤していたゴム産業は、全盛期から下り坂に入っていたが、ゴム採取の需要はまだまだあった。この地帯では英国のポンド金貨が出回っていたことも流れ者の労働者をひきつける魅力だった[2]。「一攫千金」を求めて多くの人びとがこの地域に呼び寄せられた。日本人もこの流れに加わった。

1899 年、移民会社の森岡商会が日本人労働者のペルーへの導入を開始したが、農園や鉱山などとの契約を完了し自由になったもの、契約途中で逃亡したもの、あるいは特定の契約関係を持たない自由移民の中には、大きな成功を求めゴム林での一攫千金を夢見てペルーのタンボパタに向かうもの、ペルー国境の町マルド

ナードをも超えて、ボリビア・アマゾンのリベラルタやコビハにまで進出するものもあらわれた。

アンデス越えやアマゾン川下りは、数人がひとまとまりになって移動したとされ[3]、そのルート上には日本人が散在しており、日本人越境者はこのネットワークを頼りながら、ボリビア領を奥へ奥へと進んでいった。この地域での日本人移動者の数は、2,000 名に上ったとも推定されている[4]。

多くの日本人が集ったリベラルタは、マドレ・デ・ディオスとベニの両川の交差する交通の要所として 1894 年に創設された町だった[5]。アマゾンにありながらモダンな町として発展し、多様な外国籍が住み領事館を設置した国さえもあった。

写真 1：リベラルタのマドレ・デ・ディオス川（正面）とベニ川（左）の合流眺望と渡し舟（杉浦篤氏撮影）

写真 2：日本人が上陸しようとしていた当時を描いた想像図
（リベラルタ日本ボリビア文化協会所蔵）（筆者撮影）

当初、日本人はゴム採取人として、その後は市内の小売店、郊外の農業などに職業を広げていった。1918 年の日本人数は 700 人に達したともされる[6]。ただ、町はゴム景気に支えられており、ゴム産業の凋落を契機に日本人も他の都市や他国に転じていった。この中で一貫してリベラルタに住み、同地で生涯を全うしたのが、本稿の主人公、下瀬甚吉である。

下瀬甚吉は、1885 年 7 月 26 日に山口県吉敷郡大道村に生まれ[7]、1970 年にその生涯を終えたが、ボリビアを代表する詩人ペドロ・シモセ（1940 年～）の父として知られている。しかし彼自身の人生は、移住者として苦難を歩みつつも静かで淡々としたものだった。その慎み深い生涯に私は深い興味を抱いた。

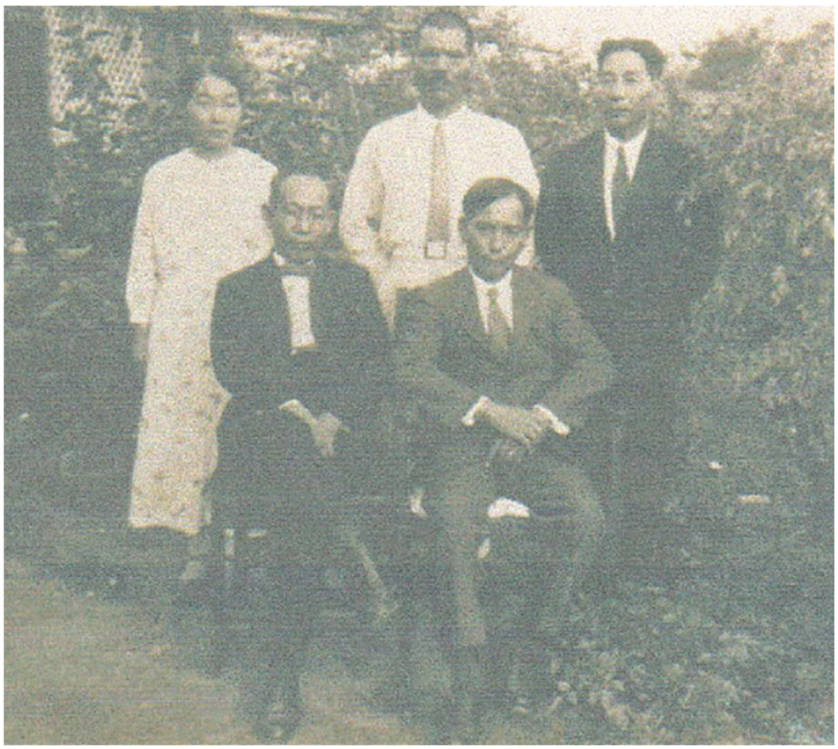
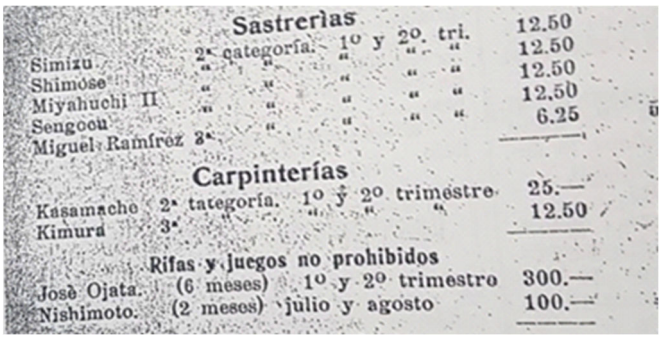


写真 3：リベラルタ日本人協会のメンバー（1937 年）
前列左から下瀬甚吉、スアレス商会に務めた重国忠治
出典：Shigekuni 1999

甚吉は、大道尋常高等小学校卒業後、農業・運搬業に従事し、1908 年 5 月 21 日、森岡移民会社の契約移民としてペルーに渡った[8]。ペルーの耕地での就労契約終了後、知人に誘われて明治殖民会社に入り、道路補修に従事した。その後、タンボパタでゴム採取を行うことになった。ゴム採取に約 2 年間従事後、マルドナードに移り、そこで農業に転じて米や豆などの農作物を売りだした。ところがその頃からゴム景気が下降期に入り、そこでは米が売れなくなり、マドレ・デ・ディオス川を通ってボリビアのベニ県リベラルタにやって来たという（地図参照）。これは甚吉の証言によると 1914 年のことだった[9]。この頃、この赤茶けたボリビア・アマゾンの町の人口は 4,000 人程度。その中で日本人の人口は 300～500 人（1918 年には 700 人）に達し、町には活気もあり、商売の可能性が広がると甚吉は考えたのかもしれない。まず甚吉がやってみたのは仕立屋だったが（資料 1)、その後、「なかなかおあしがいい」主に食料品を売る小売業に転じた[10]。

地図：下瀬甚吉の就労地及びその周辺
出典：小野 1970：6 より筆者作成



Sastrerìas

Simizu	2ª categoría.	1º y 2º tri.		12.50
Shimóse	" "	"	" "	12.50
Miyahuchi II	" "	"	" "	12.50
Sengoou	" "	"	" "	12.50
Miguel Ramírez	3ª "	"	" "	6.25

Carpinterías

Kasamache	2ª categoría.	1º y 2º trimestre	25.—
Kimura	3ª "	" " "	12.50

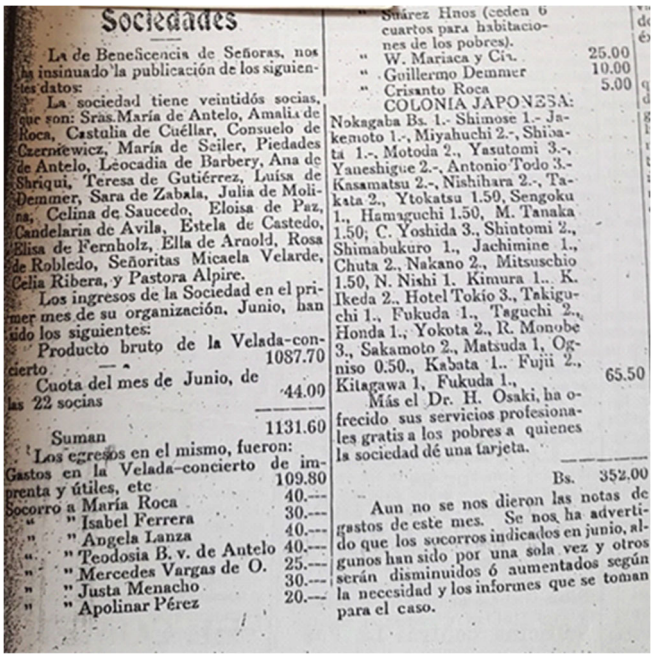
Rifas y juegos no prohibidos

José Ojata.	(6 meses)	1º y 2º trimestre	300.—
Nishimoto.	(2 meses)	julio y agosto	100.—

資料 1：仕立屋（Sasterias ）の二行目に Shimose の名が見える。
出典：*El Comercio* octubre 13 de 1918 : 4.

1917 年 7 月 15 日の地元紙「エル・コメルシオ（El Comercio)」の記事によると、その年の 6 月に 22 名の会員からなる「婦人慈善協会」主催の夜会コンサートが開かれた。記事には、コンサートで 1,087.70 ボリビアーノス（以下、Bs）の収入があったこと、22 人の会員からの会費が Bs.44 であったこと、これに対しコンサートでの支出は印刷代など Bs.109.8 に上ったこと、今回の慈善金を以下に掲げるひとびとの救済のためにつかったことなどの後に、「今月寄付してくれた」団体やひとの一覧が記載されている。この最後に「LA COLONIA JAPONESA（日本人コロニー)」とあり、寄付金 Bs.65.5 の内訳として 40 人程度の日本人名と団体名が

記載されている[11]。このリストの２番目に「Shimose 1」とあるので、下瀬甚吉は Bs.1 を寄付したことがわかる。地元社会と密接に関係構築をはかる日本人コミュニティのひとりが甚吉であった（資料 2)。



Sociedades

La de Beneficencia de Señoras, nos ha insinuado la publicación de los siguientes datos:

La sociedad tiene veintidós socias, que son: Sras.María de Antelo, Amalia de Roca, Castulia de Cuéllar, Consuelo de Czerniewicz, María de Seiler, Piedades de Antelo, Leocadia de Barbery, Ana de Shriqui, Teresa de Gutiérrez, Luisa de Demmer, Sara de Zabala, Julia de Molina, Celina de Saucedo, Eloisa de Paz, Candelaria de Avila, Estela de Castedo, Elisa de Fernholz, Ella de Arnold, Rosa de Robledo, Señoritas Micaela Velarde, Celia Ribera, y Pastora Alpire.

Los ingresos de la Sociedad en el primer mes de su organización, Junio, han sido los siguientes:

Producto bruto de la Velada-concierto	1087.70
Cuota del mes de Junio, de las 22 socias	44.00
Suman	1131.60

Los egresos en el mismo, fueron:

Gastos en la Velada-concierto de imprenta y útiles, etc	109.80
Socorro a María Roca	40.---
" " Isabel Ferrera	30.---
" " Angela Lanza	40.---
" " Teodosia B. v. de Antelo	40.---
" " Mercedes Vargas de O.	25.---
" " Justa Menacho	30.---
" " Apolinar Pérez	20.---
" Suárez Hnos (ceden 6 cuartos para habitaciones de los pobres).	
" W. Mariaca y Cía.	25.00
" Guillermo Demmer	10.00
" Crisanto Roca	5.00
COLONIA JAPONESA: Nokagaba Bs. 1.- Shimose 1.- Jakemoto 1.-, Miyahuchi 2.-, Shiosata 1.-, Motoda 2., Yasutomi 3.-, Yaneshigue 2.-, Antonio Todo 3.- Kasamatsu 2.-, Nishihara 2.-, Takata 2., Ytokatsu 1.50, Sengoku 1., Hamaguchi 1.50, M. Tanaka 1.50; C. Yoshida 3., Shintomi 2., Shimabukuro 1., Jachimine 1., Chuta 2., Nakano 2., Mitsuschio 1.50, N. Nishi 1. Kimura 1.. K. Ikeda 2., Hotel Tokio 3., Takiguchi 1., Fukuda 1., Taguchi 2., Honda 1., Yokota 2., R. Monobe 3., Sakamoto 2., Matsuda 1, Ogniso 0.50., Kabata 1.. Fujii 2., Kitagawa 1, Fukuda 1.,	65.50
Bs.	352.00

Más el Dr. H. Osaki, ha ofrecido sus servicios profesionales gratis a los pobres a quienes la sociedad dé una tarjeta.

Aun no se nos dieron las notas de gastos de este mes. Se nos ha advertido que los socorros indicados en junio, algunos han sido por una sola vez y otros serán disminuidos ó aumentados según la necesidad y los informes que se toman para el caso.

資料 2：右列記事の上から 7 行目に「COLONIA JAPONESA」
とあり、その後に Nakagaba Bs.1, Shimose 1 とある。
出典 *El Comercio* julio 15 de 1917 : 3.

リベラルタの日本人にとって新たなビジネスチャンスが生まれたのもこの頃で、沖縄県人の八木宣貞がブラジルから延びる鉄道をボリビア側に延長する工事（リベラルタ・グアヤラメリン間の鉄道建設）を受注し[12]、多くの日本人がリベラルタに集まってきた。このため米の需要が増え、郊外に日本人経営の農地も増えていった[13]。この中で甚吉も堅実に自分の店を育てていったようだ。甚吉は、その勤勉な姿勢が評価されたのか、リベラルタ日本人協会の執行部を何度も引き受けている。現在、私の手許にある 1921～29 年の日本人協会議事録で拾ってみても甚吉は会計などの要職を歴任している。ゴム・ブームが落着した当時、日本人は市外から購入していた食料品、農産品を地元で生産し、それをリベラルタの町で販売することによって生計を立て、またプレゼンスを上げていったが、他方で高まる地

元社会との軋轢を緩和する必要もあり、1910 年代後半に在リベラルタの日本人は結集し、「リベラルタ日本人協会」を設立した[14]。実際、日本人が地元との関係に苦慮したであろうことは 1917 年 7 月 10 日付の『アンデス時報』の記事「暮利比亜便り」でも分かる。当時、ボリビア政府内では「移民の品質に付一種の選択を為すこと。即ち亜細亜人の入国を禁ずる目的に適応せる法律制度を設くべき」など日本人（及びアジア系）移民への風当たりが強かった。しかし、リベラルタ周辺で大きな勢力を持つボリビア資本のゴム業界の雄スアレス商会は日本人をゴム採取人や商会の管理部門に積極的に雇用し、さらに「大体当地方人（リベラルタのひとびと）は貴邦人（日本人）あるに依りて農業の方法を習得し、尚ほ多々学ぶべき者たり」、「大に感謝しつつあるなり」（カッコ内、および読点は筆者が補足）と日本人をむしろ評価しつつあった[15]。こうした地元での好意的な後押しもあり、日本人協会は、毎年の天長節（今で言う天皇誕生日）の機会に地元社会を招待して運動会を開いたり、相撲を披露したり、あるいは 8 月 6 日のボリビアの独立記念祭には地元への寄付を欠かさないようにするなど地元社会との関係構築を重視した。こうした努力を積み重ね、少しずつ甚吉たちはリベラルタの地元社会に受け入れられていった。

リベラルタでの日本人のプレゼンスについては、1930 年に同地を訪問した外交官野田良治も日本人の「この地方の開発および進歩に協力したる功労」[16]を評価している。因みに野田がリベラルタを訪問した当時の日本人協会の会長が甚吉だったが、日本人が地元での貢献を認められたと感じる微笑ましい場面に遭遇している。同地滞在中、野田は地元の陸軍倶楽部の舞踏会の招待状を受け取った。そこに日本人協会会長であった甚吉が訪ねてきて「実は自分も招待を受けた」と述べた。これまで日本人協会は独立記念日などの「民衆的性質のもの」には招待されていたが、「純社交的宴会や舞踏会など」に招待されたのは初めてのことだった。野田は「在留邦人一同の社会上の地位が一段引き上げられた」とこのことを名誉に感じた[17]。甚吉のほっとした気持ちが伝わるようなシーンである。

甚吉は「町会も、昔はずい分皆一致して、天長節やなんかには盛大にやったも

のです。ここの官憲を呼んで」と振り返ったが[18]、いい思い出は長く続かなかった。景気が悪くなり、他の日本人はリベラルタを離れていった。

「それからだんだんとあっちへちらかり、こっちへちらかり、ブラジルへもちらかりだんだんと減って（中略）アルゼンチンにもたくさん行きました」[19]。1930年代に入るとさらに人数も減っていった。こうした中でも甚吉はリベラルタに留まり、同郷（山口県吉敷郡出身）の河村米太郎の息女であるライダ・カワムラと結婚した。なお、甚吉はこの頃洗礼を受け、ライダとは教会で式をあげた。1940年には後の詩人、長男のペドロが誕生した。後日ペドロは、なぜキリスト教的な結婚式を挙げたのかと甚吉に質問したところ、甚吉は「私を幸せにしてくれたこの国に、どのようにして感謝したら良いか分からなかったのだよ」と答え、ペドロに大きな感銘を与えている[20]。甚吉はクリスチャンになることによって、ボリビアと、そしてリベラルタと共に生きる決心を固めたのだった。

だが苦難は続いた。1943年、日本とボリビアは敵国同士となり、ボリビアでも米政府の指示で強制収容予定の日本人リストが官憲に配られた。そこには甚吉の名前もあった。米国国務省文書によると、甚吉は洗礼名であるペドロ（彼の息子と同じ名前だが）の名で記録されている。そこには、「1915 年に開店した小型食料品店。1943年時点で資本は800ドル。リベラルタ。ボリビア政府により監督」、また「ボリビアに帰化。1944年に58歳」とある[21]。幸い、ボリビア当局はリベラルタの日本人に対し、それ以上のひどい措置を行わなかった。このため甚吉たち同地在住の日本人の被害は最小限であったが、地元に溶け込もうとしていた甚吉の胸中はいかばかりだったか。後に彼の息子ペドロは、「歴史を持たぬ人々の物語」という文章で、「私の父は、死ぬまで挫折の中に苦悩を秘めてリベラルタで生き続けた」と述べている[22]。甚吉にとって平穏な日常を手にするためには地元との関係は何より大切だったはずだ。

リベラルタという場所で、家族とともに生きる決心をした甚吉。苦悩を経たが故に甚吉はひとに対しても優しかったのだろう。その謙虚な人柄について、息子ペドロは1976年の詩集に収めた「わが父の伝記（Biografia de mi padre)」に

次のように書きつけている。

「彼は人間の謙虚な偉大さを知っており

彼が敬うように人々が彼を敬い

彼が愛するように人々が彼を愛していることを知っている。

これがぼくの父だ。」[23]

その下瀬甚吉は、1970 年にリベラルタで静かに 85 年の波乱万丈の生涯を全うした。

---

[1] これらの日本にちなんだ地名は、郵便集配地点として登録された場と考えられている（ボリビア日本人移住 100 周年移住史編纂委員会 2000：122)。

[2] 「当時、イギリスのゴム買い占めにより、大量の英ポンド金貨が動いており、山奥の銀行もない村落では現ナマの金貨によって取引きされていた」(小野 1970:1)。

[3] 小野は、10 人、20 人、30 人という集団でアンデス越えを行うのが普通だったと聞き取り調査から推定している（小野 1970：5-6)。

[4] 小野 1970：12。

[5] リベラルタについては、(López Beltran 2006)を参照。

1884 年に町が創設された当時、町の名前は「ラ・クルス（十字架の意)」という名だった。翌年 7 月 7 日にこの地に店を構える商人フェデリコ・ボド・クラウセン(Federico Bodo Claussen)がこの地が高い河岸にあることから、「Ribera Alta（リベラ・アルタ：高い岸辺)」と町の名前を変え、その後、「リベラ・アルタ」が縮まり、「リベラルタ」になった。写真 2 は、日本人が「高い岸辺」＝リベラルタに辿りついたイメージを描いている。

なお、リベラルタの人口は、創設直前の 1883 年は 270 人ほどの町だったが、1905 年には 1,401 人、1911 年には 4,020 人。その後、ゴム景気が傾くと減少し、1924 年には 3,813 人となった（López Beltran 2006:318)。1923 年のリベラルタの日本人人口は 262 人と判明しているため、この頃でも住民に占める日本人の割合は少なくなかった（武中 1999：338)。

因みに、リベラルタは現在 10 万人程度の町である。

[6] 日本人ボリヴィア移住史編纂委員会 1970：59。

[7] 下瀬甚吉の生年月日や基本情報については、初期のペルー移民のデータベース PIONERO で確認可能である（移住資料デジタルネットワーク化プロジェクト PionerosVer. 2.2 参照)。https://jommdms.jica.go.jp/jp/(最終閲覧:2024.6.5)

[8] 日本人ボリヴィア移住史編纂委員会 1970：350－351。

[9] 同上：316 及び 351。

実は、この甚吉のインタビューを担当したのは、私の大学・大学院時代の恩師加茂雄三であった。1968 年 8 月 12 日に「ボリヴィア移住史編纂委員」としてリベラルタを訪れ、最晩年の甚吉へインタビューを行った。口数が少なく抑制のきいた応答からも同人の謙虚な人柄が伝わってくる。甚吉のインタビュー全文は（日本人ボリヴィア移住史編纂委員会 1970：314-317）で読める。

[10] 同上：316。

[11] El Comercio 紙記者の聞き取りなのか、何かの資料からの転写ミスなのか判然としないが、日本人名の誤記が目立つ。

[12] 八木の事業については、(丸山 2014：85-86)を参照。

[13] 日本人ボリヴィア移住史編纂委員会 1970：314-317。

[14] 日本人協会の設立は、1915 年 2 月 15 日であるというのがこれまでの通説ではあるが、根拠になっている具志寛長の議事録原本からの抜粋ノートは年月日に若干疑問点があり、状況証拠から 1918 年頃とも想定される。1918（大正 7）年 12 月 1 日付の『アンデス時報』には、以下のメッセージが見えるので、1918 年 12 月には日本人協会が設立されていたと考えられる（なお、創立年の疑義は在ボリビアの佐藤信壽氏よりの指摘である)。

「在リベラルタ中は種々御厚情を恭し尚ほ出発の際は態々御見送被下且御餞別に預り有難存候一々参堂御挨拶申上筈の處茲に略儀以紙上を御礼申上候御陰様にて無事着里仕り来る十九日カヤオ発の安洋丸に便乗致すべく候間御安心被下度候

十二月一日

柴田　直

リベラルタ

日本人会御中

其他各位

[15] 堀内 1917.7.10：4。

[16] 野田 1931：330。

[17] 同上：335-336。

[18] 日本人ボリヴィア移住史編纂委員会 1970：317。

[19] 同上：317。

[20] ボリビア日本人移住 100 周年移住史編纂委員会 2000 ： 48。

[21] Mitre 2006:175.

[22] ボリビア日本人移住 100 周年移住史編纂委員会 2000 ： 49。

[23] シモセ 2012：41 - 42。なお、ペドロにはそのものずばり「OTOSAN」という詩も

ある。同詩については細野豊氏の訳がある（日本ボリビア協会　2022：5-6)）。なお、(『カントゥータ』№5：10）には、晩年の甚吉と妻、子供たちの写真も掲載されている。

引用文献リスト

１．　新聞資料

（１）邦語新聞

『アンデス時報』160、1918.12.1
URL:https://hojishinbun.hoover.org/?a=d&d=ads19181201-01.1.5&srpos=2&e=-------ja-10--1--img-%e6%9f%b4%e7%94%b0%e7%9b%b4------（最終閲覧：2024.6.17)。

堀内伝重 1917.7.10 「暮利比亜便り」『アンデス時報』110、URL: https://hojishinbun.hoover.org/ja/newspapers/ads19170710-01.1.3（最終閲覧:2024.6.13)。

（２）現地新聞

El Comercio. Semanario Independiente. Año II. No 55, julio 15 de 1917, Riberalta, 3.

El Comercio. Semanario de actualidad. Año III. No. 100, octubre 13 de 1918, Riberalta, 4.

２．議事録

リベラルタ日本人協会議事録 1921-29、ボリビア日本人移住史料館

３．電子文献

Asociación peruana japonesa (APJ)、JICA 横浜海外移住資料館 Pioneros ver.2.2 ペルー日本人移民データベース（1899－1941） URL: https://jommdms.jica.go.jp/jp/（最終閲覧：2024.6.17)。

４．参考文献

（１）欧文

López Beltrán, Clara. 2006 “Un imaginado banqueta comercial: una historia de Riberalta (Bolivia) 1890-1920”, En Pilar Garcia (ed.), *Estado, región y poder local en América Latina, siglo XIX-XX*, Baecelona: Ube/TEIAA, 305-327.

Mitre, Antonio. 2006 *Náufragos en tierra firme bloqueo comercial, despojo y confinamiento de japoneses de Bolivia durante la segunda guerra mundial*, Editorial EL PAIS.

Shigekuni, Martha. 1999 *Breve reseña histórica de la inmigración*

japonesa a Bolivia. （私家版写し）

（２）日本語

大塚真琴 1992「新垣庸英とボリヴィア逃亡移民」『移住研究』29、89‐143。

小野基雄 1970「アンデスを越えた人々－ボリビア日本人の先駆者－」『移住研究』6、1-18。

シモセ、ペドロ（細野豊訳） 2012『ぼくは書きたいのに、出てくるのは泡ばかり』現代企画室。

武中来 1924「移民地事情　第六巻　暮利比亜視察報告」外務省通商局（以下に所収　外務省通商局編 1999『移民地事情　第 4 巻』富士出版）。

日本人ボリヴィア移住史編纂委員会 1970『日本人ボリヴィア移住史』

日本ボリビア協会 2002 『カントゥータ』№2、東京。

日本ボリビア協会 2004 『カントゥータ』№5、東京。

野田良治 1931『南米の核心に奮闘せる同胞を訪ねて』博文館。

ボリビア日本人移住 100 周年移住史編纂委員会 2000 『日本人移住 100 周年誌 ボリビアに生きる」。

丸山浩明 2014「マデイラ・マモレ鉄道建設の政治・経済・社会的意義－ブラジル旧共和政期における国土開発の試練」『立教大学ラテンアメリカ研究所報』43：71-92。